

平成 27 年度 情報教育研究センター学術講演会

ひとつのドラマができるまで

— TV プロデューサーが語る情報コンテンツ —

日 時 12 月 4 日（金）16：30～18：00
場 所 中央図書館 2 階 グローバルスタジオ
講 師 関西テレビ放送株式会社 谷口 俊哉 氏
(司 会 情報教育研究センター常任委員 丸山 健夫)

1. 講師紹介

○丸山 みなさまご多忙の中、お集まりいただきありがとうございます。平成 27 年度情報教育研究センター学術講演会を始めたいと思います。今日はたぶん学生さんが非常に多いのですが、ジャニーズファンはどのくらいいますか。ああ、いらっしゃいますね。今日はジャニーズに関わり深い方が出てまいります。講演会のテーマは「ひとつのドラマができるまで」です。

まず、谷口先生のご紹介から始めたいと思います。先生は京都大学卒業後、関西テレビ放送株式会社に入社され、ずっと制作現場で仕事をされてきました。第一線でドラマ作り、その他いろいろな番組を作られています。それでは谷口先生ご入場ください。(拍手)



図 1 司会の丸山健夫教授(左)と講演者の谷口俊哉氏(右)

2. 講演「ひとつのドラマができるまで」

○谷口 ただ今ご紹介にあずかりました谷口です。よろしくお願いします。関西テレビでずっとドラマを中心に番組を作っています。今ここ(卓上)に並べているのは、私が作ったドラマ、DVD を置いています。特にジャニーズ系が多いのですが、そういったものに関して、長い間培ってきたコンテンツの作り方というか、その精神というか、そういったものを少しでもお伝えできればと思っています。

○丸山 それではまず最初の動画から始めたいと思います。これはテレビドラマデータベースです。これは谷口先生が作られたドラマが一覧になっています。

○谷口 私が何十年も作ってきたドラマが改めて流れると不思議な感じがします。古いものとしては、月曜日 22 時、今は SMAPXSMAP を放送していますが、サスペンスドラマ枠で演出やプロデューサーを担当していました。またジャニーズや深夜のドラマなども演出・プロデュースをしましたが、改めてたくさんの方をやってきたなと思っています。最近は数年、関西のジャニーズと一緒に仕事をしていて、そのドラマを作るという感じです。つい最近では映画を作っておりまして、関西のジャニーズを使った映画を何本か製作しました。

① ドラマとは何か？

○丸山 まずはお聞きします。ドラマとは何か。

○谷口 テレビ番組はみなさんご存知のように、情報番組であるとか、バラエティ番組であるとか、たくさんありますよね。その中でドラマというのは、ゴールデンタイムにたくさんありまして、だいたい 3 か月でワンクールが終わる。そういうドラマをたくさんやっています。

○丸山 今日はドラマの数字のデータも出しています。1700 本とありますね。

○谷口 1700 本というのは、1 年間のドラマの数です。要するに、シリーズだと 1 回で 12～13 本を 1 本と数えて、単発や深夜を含めて 1700 本作っている。ただこれはここ何年かで減少しています。帯ドラマは NHK の朝ドラ、東海テレビの昼ドラ、今はその二つしかないんですが、昔はもっと帯ドラマがあったんですね。ドラマの数は非常に減っています。我々ドラマを作ってきた人間にとっては非常にさびしい現況です。

○丸山 それはなぜですか。

○谷口 それはいろいろな理由があると思います。テレビ離れが加速していると聞きますよね。ネットと

いろいろなメディアが出てきたことによって、かなりテレビのシェアが減っているんですね。

○丸山 見る人が減っているということですか。

○谷口 そうですね。ドラマというのは制作にお金がかかるんですね。いろいろあるので、いちがいには言えないですが3000万～4000万、これは何かというと、1時間のドラマを作る時にかかるお金です。火曜の10時とか木曜の9時とかドラマがありますが、平均がだいたいこんなものです。ということは、バラエティ番組でたとえばお笑い番組であれば同じ1時間でもそんなにからない。1000万はかからないです。

○丸山 だからよく、芸人が出てきて終わりという番組が多いんですね。

○谷口 多いですね。でも、同じ数の人が見るとしたら我々テレビ局としてはドラマ以外の方が効率がいいんですね。だからドラマそのものが減っていったという事が現実にありますね。

○丸山 疑問がありまして、ドラマというのは映画とどうちがうのですか？

○谷口 映画の場合は自らお金を払って観客の人が観に行く、テレビの場合は電源をつけていれば流れる、CMがあるので無料ではないのですが、お金そのものが直接かからないというのがドラマなんですね。どこが違うかというところ成り立ちが違うわけですね。映画の場合はお客さんが入らなければ本当に赤字になるんですね。現在、映画はたくさん作られているんですが、黒字になる映画はほんの一割もないんです。ほとんどは赤字なんです。でも映画をがんばって作る。映画にける夢がある。ですから映画とテレビとはかなり違う。

映画の場合は、「映画監督」という言い方があります。映画を監督する人を「監督」と呼ぶ。テレビドラマの場合は通常、「演出」と言います。

○丸山 テレビドラマのエンドロールでよくみる「演出」というのが実は映画でいう「監督」にあたるということですね。

○谷口 映画を作る場合には「製作」という言葉、テレビの場合は「制作」。最初に映画があって、そこからテレビ、テレビドラマが出てきた。そのときに差をつけようとした、映画人の意地みたいなものが実はあって、後発のテレビを下に見ていた時代があった。だから映画とドラマでは大分違う。

よく映画では手弁当という言葉で、自分たちのお金を掛けて作ることがよくあるんですね。自分が損してでも作りたいという人が映画を作る。テレビドラマの方はちゃんと作って利益をあげないといけない。そこがメディアとしては違うという感じがします。



図2 講演会の様子

②企画はどこから生まれるのか？

○丸山 谷口先生がずっと関わってきたテレビドラマは、必ず収益をあげないといけないということですから、企画が結構問題になってきますね。企画はどうやってできているのですか。企画にもいろいろなタイプがあるでしょうから、今日は企画のタイプがちがう三つ作品を持ってきました。

○谷口 なりたちがちがう三作品を持ってきました。

○丸山 それでは谷口先生の作品を順に流した後、お話をうかがいます。

◆「間寛平少年物語（関西テレビ 45 周年記念）」

○谷口 このドラマは関西テレビ開局45周年記念番組「間寛平少年物語」で、マラソンランナーでお笑い芸人の間寛平（はざま かんぺい）さんの少年時代をドラマ化した内容のものです。寛平さん自身も出てくるのですが、基本的には子役が役をやるというドラマです。これはどういう成り立ちかというのは後ほど話したいと思います。時代が昭和30年くらいの話なので、当時の服装であったり、学校も廃校を使用したり古い時代が出てくるドラマです。場所は奈良の山奥で撮影しました。人里はなれたところに合宿状態で10日くらいかかりましたかね。雨がよく降る所で、一日雨で撮れないなんてことがしょっちゅうあるロケ地でした。これもそういう林の中で子供たちを中心に撮っていました。寛平さん自身は不思議な存在、妖怪のような役で出ていただいた。森の中で非常にながらばって撮ったものです。

○丸山 （木の上に乗っている画面を見て）これは本当に木の上に乗っていたのですか？

○谷口 木の上に乗っています。遠藤久美子さんに新人の女教師をやってもらったんですが、これには命綱もつけています。まあまあ高いので落ちて怪我をす

るわけにもいかないで、命綱を使ったり、下に色々しかけをしたり工夫をして撮りました。しかし、おりのシーンでは、ちょうど似たような木があったので、低い木を使いました。これは専門語でいうとモンタージュという手法です。何人かの学生さんは知っていると思いますが、映像の編集にあわせることによって、ちゃんとつながります。現在は CG が非常に発達していて、結構合成で作ることもあります。

◆「寮フェス！」(映画)

○谷口 では、ジャニーズファンの方はご存知だと思いますが、「寮フェス！」をご覧ください。この映画の前には、関ジャニ∞とはずっと仕事をしており、関ジャニ∞の渋谷、村上、横山という3人を主演にしたメンバー全員出演のドラマを作りました。その流れでこの映画を作りました。これは関西のジャニーズJr.を使った映画です。ある廃寮になる学生寮を舞台に寮生であるジャニーズのメンバーが、フェスティバルをやってそれを阻止しようという青春学園物なんです。撮影場所は、丹波篠山の廃校を舞台に撮りました。全国何十か所の映画館で公開して、DVDで販売しました。いまだに活躍している子もいれば、引退した子もいます。演技が初めての子もいました。演技はまだでしたが、ジャニーズは勘がいい。今の映像にはありませんが、歌ったり踊ったりが得意技です。ここは大手前大学で撮影させてもらいました。その後いくつかジャニーズJr.で撮っています。ジャニーズ事務所としても若いこれからの人を育ててほしいと言う要望が基本あるんです。

○丸山 ジャニーズについては、その後も作られたということですね。シリーズの初版でどれぐらいの売り上げがあったと思われますか。

○谷口 すごかったですね。テレビドラマ化してDVD化した。初版で4億5千万の売り上げがありました。当時のDVDの新記録で、テレビドラマが1位を取ったのは、「踊る大捜査線」以来だということで、雑誌や新聞にも載りました。何回も版を重ね、最終いくら売れたかは私も知りません。

◆「再会～奈津子の結婚～」(ドラマ)

関西テレビ開局 35 周年記念 日台合作ドラマ

○丸山 さて、3本目です。これはかなり問題を提言するようなドラマですね。

○谷口 テレビ局は周年ドラマという、5、10、50とか区切りにその年を代表するようなドラマを作ろうということが昔からある。これは35周年の時にテレビ局もまだまだ元気だったので、お金を使って問題作を

作ろうという企画があってやったのがこの「再会～奈津子の結婚～」です。これは日本の戦争責任を扱ったドラマです。日本と台湾を舞台にしたドラマで、日本人と台湾人が恋人同士になって、それを反対する祖父がかつて日本軍として台湾に行き、その過去があらわれるという娯楽というより問題作です。これは局を上げて作るということで、かなりの制作費を使った作品です。半分以上台湾でロケをしました。ただそれを成立させるためには非常に大変な努力をしました。企画というのはいろいろな状況があって、限定要因、リミテッドファクターがいっぱいあって、自分がこれをしたからできるものではなくて、「主役はこの人がいいからこれで作ってください」等という場合がありますし、このドラマみたいに「何周年なので、世間に何か問題意識を問かける物を作ってください」という場合もあります。そういった色々なケースがあります。先ほどの関ジャニのDVDに関しては、「DVDで売れる企画を考えてください」ということが最初でした。そうした色々なケースの中で企画書を上げます。それはドラマに関係しているみんなが企画を考えて、企画書を作って、それをプレゼンします。プレゼンをしてこれならいけるだろうということで会社的にGOが出たら、こういったものに実際に台本を作ったり、キャスティングをしたりドラマ作りに入っていきます。特に35周年は大々的に作ったこともあり、3回ぐらい台本を作り直しました。最初の頃は「さよなら再見(サイチェン)」というタイトルでした。「再見」はみなさまご存知のように、中国語で「さよなら」という意味です。もしかしたら映画で見られたかもしれない。台湾で非常に有名な作家がおり、その作家が書いた国民的な作品を映画化したもので、それを原作に作ったものです。日本でも公開されて有名になりました。それは日本の売春ツアーのおじさんたちが向こうで通訳の人にやりこめられる、同時に台湾の学生も、同時通訳の中で通訳にやり込められるというよくできた作品です。それを日本版に置き換えようと言うのが最初の企画でした。ところがかなり問題意識を前面に出して色んな所からもきつと言われて、日本の天神祭に關した話に書き直しました。それでもまだいろいろ反対意見があって、最後「再会～奈津子の結婚～」という話になった。日にちがすごくかかり、準備だけで1～2年かかった。そういう風にドラマにはすごい準備がかかるものなんです。

○丸山 企画のちがいがから考えて、3つの作品を出していただきましたが、最初の作品は間寛平さんというお笑い芸人のものを作ろうという企画ですか。

○谷口 そうですね。「会社として45周年でお笑い

芸人さんを主演にしてドラマを作りたい」と言う企画がまずありました。

○丸山　　ということは、会社から、こんなものが作りたいという企画が出てくるということでしょうか。それに関して何人かのプロデューサーがいて企画を出すということですね。

○谷口　　最初は西条凡児さん、横山やすしさんと私の間寛平さんという案が3人のプロデューサーから出ました。西条凡児さんはいろいろな問題があってできなかったのですが、横山やすしさんと私の間寛平さんという形で企画しました。

○丸山　　3人のプロデューサーがいろんな企画をもってきて、たまたま谷口先生は間さんとかかなり親しい関係にあったということからの企画ですか？

○谷口　　レギュラー番組もやっていましたし、海外に7回ぐらいいろいろな国に番組で一緒に行っていました。それで親しくなっていることもありました。寛平さんは驚くほど変わっています。いい人なんですけど。話していると、子ども時代は野生児で、彼は高知の山奥の分校で育ったんですね。そこでお父さんの炭焼きの仕事がだめになって大阪に出てくるんですけど、昔は林の中に火を吹く蛙がいたと言い切るわけです。そういう話を聞いていると少年時代を描いてみようと思っていろいろ取材をして、お母さんであるとか、おじさんであるとか、いろいろな所で取材をして、本人からも聞いて、それで企画を立てて作ったというような形ですね。

○丸山　　プロデューサーをやっているとコネクションが非常に大事ということですよ。コネクションのない場合は、一生懸命自分で調べていくということですね。台湾の共同ドラマに至っては、かなり調査をし、3つもほぼ完成の台本ができていて、3つの中から1つ選ばれた。すごい決断ですね。

○谷口　　もちろん判断するのは自分たちではなくて、テレビ局にはいろいろな営業があったり、編成というところがあったり、制作現場もあって、いろいろな意見があるんですね。特に「再会～奈津子の結婚～」に関しては、戦争物なのでスポンサーに売りにくいということが実はあった。それで修正に修正がかかっていったというのが現実です。

○丸山　　ジャニーズの方も個人的な繋がりが結構大きく影響しますか。

○谷口　　そうですね。最初やる前に関ジャニ∞とは番組もいっしょにやっていましたし、全員参加のドラマも作っていました。彼らがまだ売れていない時代からいっしょに仕事をしていたのでそこはかなりメリットというか有利なんですね。売れてからつかまえると

なかなかそうはいかない。今でもうちで「ジャニ勉」という番組をやっているのですが、これはローカル局でやっている唯一全員が出る番組なのですが、元々関ジャニ∞の∞は8チャンネルに引っかけたものです。それをいまだにやっているということは、彼らがシンパシー、恩義を持ってくれているということだろうと思います。そういう人間関係は大切ですね。

○丸山　　そういう人間関係の中に間さんが出てきたり、ジャニーズが出てきたりいろんな人が出てくるのがすごいことです。そして、一つの作品を作るためにいくつもお蔵入りになっているのですね。企画は並大抵ではできないということですね。

○谷口　　そうです。

○丸山　　「企画はどこから生まれるのか」という話をしました。それでは次の映像の制作現場の話に進んでいきたいと思います。

③スタッフの役割は？

○谷口　　（写真を見ながら）ロケ現場では、だいたいアップした時に記念写真を撮るんです。スタッフはこれだけ現場にいるんですよ。現場以外にもいるんですけど、現場の人数だけでもたくさんいる。この中に、皆さんがよく聞くプロデューサーであるとか、助監督であるとか、あと技術のカメラマンであるとか、美術やメイクであるとか、衣装であるとか、それ以外にもスタジオさんとかスチールさんとかいろいろな仕事があるんですね。それが台本上に書いてあります。現場では、たくさんスタッフと同時に動いています。

○丸山　　ということで、スタッフの役割ということは今から聞いて行きたいと思います。

○谷口　　これも一つの基準ですが、30～40人が現場のスタッフ数です。番組の規模で多少変わります。出演者は別です。これだけの人数がいます。スタッフは一体何をしているのかということですね。まずチーフプロデューサーはいったい何をするのか。全体の予算を見る役で、3000万の予算をどう使うか、ロケにいくら使うか、仕上げにいくら使うか、そういうことを采配するのがチーフプロデューサーです。

○丸山　　CPと書くのがチーフプロデューサーですね。あとはプロデューサーですね。プロデューサーは何をするんですか。

○谷口　　プロデューサーは企画を考える。そして、台本を作るのはプロデューサーと監督です。プロデューサーが現場に来た場合には、現場の管理、お金の管理が一番大きいですが、たとえば弁当をどうするのか、800円の弁当にするのか500円にするのかとか。AP（アシスタントプロデューサー）がやる場合も多い。お金

に関する管理、人に関する管理もします。たとえば、役者さん、俳優さんの送り迎えをすとか。話し相手になるというか、プロデューサーは全体を見て、ロケが押して時間が遅くなっていてスタッフが疲れていないか、今日はこの辺で終わりにしよう判断するのもプロデューサーの仕事です。現場管理ですね。

○丸山 演出と書いてあるのは映画という監督のことでしたね。

○谷口 監督はいわゆる現場監督です。台本を作るのは監督の仕事ですから、それを元にどういうふう撮るか。カメラでどう撮影するのか。一番大きなのは役者に対してどうするのか。演技をつけるというのがディレクターつまり演出ですね。

○丸山 制作というのとは何ですか。

○谷口 制作進行とも言うのですが、人を運んだり、弁当の実際の手配をしたり、一番大きいのはロケ地を確保するということが制作の仕事です。ドラマでは色々なところで撮ります。大学で撮るとか、鉄道で撮るとか、そこに交渉をして、何時から何時までここを貸してくださいと交渉するのが制作進行の一番の仕事です。

○丸山 記録はどうですか。

○谷口 記録というのは、映画およびテレビで結構重要なポイントの仕事で、ほぼ女性です。テレビというとタイムキーパー、時間を管理する人です。ひとつはドラマの尺、60分のドラマであれば中身45分の内、今何分ぐらいを撮りましたよという計算をしてくれる人たちで、このシーンは短くしか撮れていませんよ、もっとほかで伸ばしてくださいとか時間調整をする。それと、芝居のつながりを見る。たとえば二人が同時に何かをしゃべる場合、結構一方的にしゃべると、動きが違っていたりする。そういうところを見ているのが記録さんです。目線の違いを見ているんです。これは極めて専門職です。しかも女性が多い。記録さんを作る学校がない。先輩の記録さんに弟子入りして現場で学ぶ。この技術を身に付けたら、十分生活していただけます。もしこの世界を目指すのであれば、大変ですけど女性にはお勧めの職業です。元々映画は撮ったフィルムは現像してからでないと誰も見れないんです。記録さんが覚えていないとわからない。つながりも、たとえば今撮ってすぐつぎを撮る場合もありますが、3日後に撮るとか、1カ月後に撮る場合もある、その時に衣装はどの衣装だったか、そういった細かいところまで全てチェックしている。記録さんの台本を見せてもらったことがあるのですが、みんなそれぞれの形で本当に暗号表のようです。この人はどこを向いているとか右手がどこでとか全部書いている。そうしないとつ

ながりがうまくいかない。今はVTRがあるのでどうしてもわからなければ、今の見せてということで、新人の記録さんは内緒で見えています。そういう特殊作業です。

○丸山 「人間ビデオテープ」のようなものですね。これは本当に重要な仕事ですね。メイキングというのとは？

○谷口 メイキングというのはDVDを作るときにメイキング映像を撮って特典映像というのを作らなければならない。実はそれをジャニーズドラマなどでは売り物にするわけです。「テレビで見られないから買って見てください」という非常にいやらしい商売をしているんですけど、それを撮る人がメイキング。これもなかなか重要です。

○丸山 ロケ協力とは？

○谷口 ロケで協力してくれた施設とか、会社やコーディネーターなどです。

○丸山 撮影とは？

○谷口 カメラマンですね。

○丸山 カメラマンは、これを撮りたいとかあれを撮りたいとかこだわりがあるでしょうね。

○谷口 ありますね。結局は監督とのコミュニケーションですね。

○丸山 ディレクターがこれらの人たちの思うように動かすには、かなり軋轢が生じるでしょうね。

○谷口 やはりぶつかりあいの中で作品というのはできて行く。何でもそうだと思いますけど、ぶつかりあわなければいいものはできない。それは間違いないことです。

○丸山 VEとは？

○谷口 VEさんとはビデオエンジニアです。VTRの調整をすることですね。露出であるとか色とかを調整する。ビデオ特有の仕事です。ベテランのVEさんは実はすごくて、普通の人は画面を見つつ、合っているとか肌色で見たりするんですが、数値だけで見る人もいます。VEさんはビデオでは重要な役割です。

○丸山 照明とは？

○谷口 照明さんは親方と呼ぶ。映画の世界で一番幅をきかせているのは照明技師なんですね。どこの撮影所に行っても照明の親方は怖いんです。私たちも東映や松竹で撮影するんですが、無茶苦茶怖いです。照明さんはどこの現場に行っても強面で、体力的にも重たいライトを持って走り回らないといけないためにムキムキで強気。それに対して音声さんは周りに静かにしてもらうためにどこの現場に行っても静かで照明さんとは対照的です。

○丸山 では次に編集ですが。

○谷口　今は編集とCGをやる人も多くて、監督のもとに編集をやるという形ですね。

○丸山　編集するときビデオであれば、30分の1秒のフレームにこだわる人とかいるんでしょうね。それは全部ディレクターが管理するわけですね。

○谷口　そうですね。連続ドラマのときには忙しくて出来ないときがあるんですね。粗（あら）編集と言いまして記録さんと編集さんでまず長めに作ってもらうんです。たとえば撮ったカットを全部つないでおいでもらって、そこから5分切らないといけないなど監督の指示で編集します。

○丸山　では次は、効果ですね。

○谷口　効果と言うのは音をつけるんですね。ホラー物で怖い効果音をつけたり、夜のシーンに犬の遠吠えを足して表現を足したり、海のシーンには波の音を入れるなどいろいろな効果音をつける、とても面白い仕事です。

○丸山　ではあと、美術製作というのは？

○谷口　美術製作というのは大道具、セットをたてたりする仕事です。デザイナーが設計をして撮りやすいようにセットを作っていかなければいけない。ハイビジョンでも偽者とばれないように、いかにしたらリアルに伝えられるかを工夫します。セットをたてて生活感を出すためにわざと汚しをかける、その汚しをかける技術を持つ人はすごくてひっぱりだこになりますね。

○丸山　あとはメイク、車両手配、ロケバスの運転手などですね。そして、重要なのがキャストですね。

○谷口　キャストは台本に書かれていますが、主役が誰、相手役が誰、というキャスト表があります。

○丸山　エンドロールもそうなんですが名前が出る人と出ない人とがありますよね。何か基準はありますか？

○谷口　ひとつの基準としては台詞があるかないかですね。その他はいわゆるエキストラという形になります。

④役者はどうやって決まるのか？

○丸山　キャストというのはどうやって決まるのですか？

○谷口　これもまたケースバイケースなのですが。連続ドラマなどを見てると売れてる人というのは頻繁に出ますよね、4月のドラマに出て7月に出て12月に出て…など、主役に関しては比較的早い段階で決まってるんです。旬な人に集中するので取り合いです。主役がまず決まっていて、その人ならどんなことが出来るかを考えていく。

○丸山　プロダクション同士のやりとりがあって、主役の人にあった配役を考えるということもあるのでですね。

○谷口　当然ありますね。そういうケースが多いです。それ以外も、主役が決まって相手、脇役、それにあった役を決めていく。スケジュールや同じ時間帯に出てはいけないというテレビの細かいルールをチェックしてプロデューサーを中心に脇を決めていく。プロデューサーがお金をおさえていますから、いくらかかるかなど計算しなくてははいけませんから。

だから主役にすごい人がきたら脇は安い人でやらざるを得なくなります。テレビと言うのは波及力がすごいので、若いタレントさんに関してはプロダクションさんも売りたいので、ギャラはもういいです、安くてもかまわないので出してください、と言う人もいます。そういう人は出やすいし我々も助かります。

○丸山　新人が役をもらおうと思うとオーディションなどが一般的でしょうか。

○谷口　そうですね。オーディションシステムはNHKさんが特に公平性のために多用するのですが、朝ドラの主役に関しては、何度も何度もオーディションします。書類選考があって、1次から6次くらいまでおこなって絞ります。絞った中で他の役にすることもあるのですが、オーディションは必ずします。我々では、特に子役のオーディションが多いです。子役は成長が早く、書類の写真と異なることもあるので実際に見て決めます。こういう年代のこういう子を出してくださいとプロダクションにお願いしてプロデューサーと監督が見て決めます。オーディションは新人にとって、ひとつの門戸であると言えます。

⑤ロケのやり方は？

○丸山　さてこれでスタッフと役者が決まったということで、いよいよ次は撮影、ロケですね。ロケの映像を流しながら次の話題に行きたいと思います。役者さんはドラマで一番大切ですね。

○谷口　そうですね。ロケに関しては、役者さんが一番ベストの芝居ができる環境を作るとするのが大切ですね。役者に媚びるのではなく、ロケ中に誕生日があれば誕生日祝いを出したり、アップしたら花を渡したり気を遣っています。いい環境でいい芝居をしてもらいたいからです。

○丸山　撮影の進め方を教えていただきたいのですが。

○谷口　まず台本を持って本読みというのをします。読みあわせをするんですね。ここはもう少し強く、この言葉を変えましょうと打ち合わせをします。演出家と出演者の腹のさぐりあいみたいな部分もあるので

すが、まず最初に本読みをします。いよいよ当日本番。どこかのスタジオ、たとえばここ、このホールの中で二人がいてこう動きましょと、実際動いてみて台詞を言う。監督を中心にドライリハーサルをして芝居を作っていきます。スタッフ、特にカメラマンはそれを見てこれをどう撮ろうかなということを考えるわけです。その後、監督とカメラマンを中心に打ち合わせをして、最初はアップで、次は広いワイドで入りましょとか、カメラの準備をします。そしてカメラリハーサルをします。現場と言うのはすごく手間がかかるんですね。繰り返しカメラリハーサルをして OK が出たら初めて撮影をします。カメラ一台ならワンカットしか撮れない。ワンカットずつ丁寧に撮っていきます。テストをして OK なら VTR を回す。カメラが移動して次のカットの準備をする。カメラが変わると照明も全部変わるんですね。キャッチと言う顔に当てるライトなどです。カメラアングルが変わると音声も変わる。美術のセットを変えることもあります。カメラの場所が変わると全員が動くので、ドラマと言うのは非常に作成に時間がかかります。平均してワンカット撮るのに準備の時間を入れて 15 分から 20 分、1 時間で 3 カットか 4 カットしか撮れない。ドラマには時間がかかる、日数がかかると費用がかかるので詰めて撮らなければいけない。朝 6 時にスタートしたら、香盤表（こうばんひょう）やスケジュール上、30 時という時間まで撮りっぱなしということもあります。

○丸山 ワンカットというのは、1 秒や 2 秒ということもあるんですね？それに 20 分くらい？

○谷口 もちろんです。20 分くらい完全にかかります。

○丸山 ひとつひとつ積みあげて作っているのがよくわかります。そこで今お話に出た香盤表というものがすごくロケにおいて力があるんですね。

○谷口 使っておられる方もいらっしゃるかもしれませんが、元々芝居の舞台であったものなのですが、何かと言いますと、ロケやスタジオ収録のすべての情報が入っているんですね。この日はこういうシーンをこの場所で撮ります、誰が出ます、2 時間かかります、60 分で撮りましょ、ここでこれが要りますなど、これにすべての情報が入っていますのでスタッフは台本と香盤表しか持ってないです。これが間違っていると大変なんですね。香盤表一枚持っていれば済むんです。

○丸山 11 時から 12 時のあいだ、この場所で撮りますよという場合は、必要な人にすべて丸がついてるんですね。撮る側の時系列で、いつ出て行けば良いかがわかる。ロケ現場が動くためのプログラムですね。

○谷口 たとえばこの男性教師役はここから必要であるから、それに合わせてメイクさんのスケジュール

を入れる。すべてのスタッフがこれを元に動くんですね。しかも変更もある。時間が押せば変わってくる。次の日のものまで変わる。だから、一日ごとに出しています。香盤表はネットでもテンプレートがあると思います。ドラマ制作以外でも使えると思います。

○丸山 人々がこの部分だけ出たら良い、と予算管理にもつながっているんですね。というわけでロケのやり方でした。次の映像を見ていただきます。

⑥撮ったあとどうする？

○丸山 では撮った後どうする？というのが次のテーマです。

○谷口 撮影が終わりました。その後はいわゆる仕上げ、編集ですね。つないで一つの作品にしていきます。過程としてとても重要です。編集は 1 フレーム 30 分の 1 秒にもこだわってなるべく時間をかけたいところです。自分自身との戦いでもあるので非常に時間がかかります。編集ができたなら音楽を入れます。作曲家に頼んでシーンに合う曲を作り、効果音と一緒にあわせて完成させます。

○丸山 シーンとしてできているものを音楽家に見せて音楽を作ってもらうんですか？

○谷口 スケジュール的にそうなることが多いですね。監督からこういう感じの音楽がほしいと、オーダーして作ってもらう。僕は一緒にやる作曲家は何人か信頼している人に決まっていました。

○丸山 MA、マルチオーディオというのは？

○谷口 MA というのは略称なんですけど、ビデオは音声チャンネルがいくつもあるので出演者の台詞をレベル調整している、背景音、バックノイズを調整して入れる、効果音をどんどんミックスしていくんですね。効果音と音楽をつけるのが MA の作業です。それをして完成品になります。

○丸山 完成して試写をする。感動でしょうね。

○谷口 感動というか演出家としてはプレッシャーです。他の人がどう見るかが気になりますね。眠そうだなとかね。試写会のときに寝てる人がいるとがっかりしたり。ガラスの心臓になります、試写会は。

○丸山 記者発表や PR をしたり、最近はネットの力が大きいですね。

○谷口 そうですね。見逃し配信などもやってますし、ドラマは少し前までは YouTube に勝手にアップされてしまうから DVD が売れなかったりしたのですが、今は逆に YouTube と連動して PR 作戦をやったりしていますし、今はネットを無視できません。時代も変わってきたなと思っています。

○丸山 ここまで制作から発表まで駆け足で追いか

けてきましたが、谷口先生はドラマの世界に生きられて監督するときにスタッフとの葛藤、俳優との葛藤についてうかがいます。

○谷口 俳優さんとは戦いですね。顔には出しませんが。現場ではすごく葛藤します。ここからここまで歩いてくださいといっても、俳優もこの方が良いでしょう。意地ではないのですが、お互い良い作品が作りたいのは、一緒です。うまくほめて乗せたり駆け引きをします。心の知れた連中とやると楽でやりやすいのですが、ベテラン俳優ほど戦いですね。

○丸山 私も本を書くのですが編集者との戦いですね。客観的にいい本を作りたいというのは同じなんです。編集者の中には原稿のことを「お原稿」って言う人がいます。原稿が客観的なんですよね。浮いてるというか。

○谷口 似ていますね。我々も芝居を「お芝居」と言うことがあって一般的にそう言うんですが、スタッフもそう言うんですね。役者の方もそう言う。お互いにとって客観的なコンテンツなんだと思います。それと似ていますね。

○丸山 クリエイティブに何かを作っていこうと言うときは、自分じゃなく他の人が書いたような境地になるんですよね。

○谷口 物を作るとそういうことになりますよね。

○丸山 客観的にいい作品を作ろう、と人間をまとめていくのがディレクターの仕事なんですね。

○谷口 結局チームワークが力ですからね。

○丸山 ということを経年やってこられたわけですが、今後、そのご経験を若い人にどういう風に伝えていきたいですか？

○谷口 僕の助監督がドラマの監督になっていた、チーフ演出家になっていた、後身が出てきます。それがうれしいんですよ。僕は大学は全然関係ない農学部から。ドラマが好きで、ドラマを撮りたくてテレビ局に入ったんです。自分の人生を決めるときに、最初は単純な動機で入って、自分がやりたいことや言いたいことは後から出てくる。これから社会に出る若い学生さん方が多いのでこういう話をするのですが、きっと単純でも自分がこれをしたい、と思うことが大切。志望の動機になるんだと思います。テレビで見たタレントに会いたいから、そう言う人がいても僕は良いと思います。何をすべきか、自分に何ができるのか、は現場に入ってから後からついてきます。きっとやりたいときは単純な志望や動機が強いと思いますよ。会社でもすぐにやめてしまう人とかもいるんです。色々な人を見ているとやっぱり将来設計や収入条件なんて考えてちゃだめなんです。自分が何をしたいか、

が根本かなと強く思います。ではせっかくドラマの作り方を言ったので、最後にもう一言だけ。ドラマというのは年齢問わず誰でも作れます。今は機材がすごく進んでいて、編集ソフトも簡単に操作できます。どんな人でも作れます。音は別マイクでとるなどプロとしての技術が必要な部分もあります。でも必ず作ることができるんです。皆さんぜひ作ってください。裾野は広がっています。しかも発表の場はいくらでもあります。YouTube や SNS など作品を見に人が集まって、そこから監督になっていく人もあります。昔はテレビや映画はそういう業界に入らなければ作れなかったんです。でもこれからはそうではないんです。興味がある人は、この講演会に来たと言うことは少しは興味があるのかなと思いますので是非是非皆さん作ってみてほしいと思います。若い人たちだけじゃないんです。若くなくても出来るんです。この時代だけの良いものをたくさん作ってほしい。実際映画でも、そんなところから大ヒットしたものがたくさんあるんです。ご存知かと思いますが、「ブレア・ウィッチ・プロジェクト」というのは元々学生が作ったものなんですね、VHS ハンドカメラで作ったんです。「パラノーマル・アクティビティ」というホラー映画は、定点カメラだけで作ったもの。そういったものが大ヒットして、費用は 100 万かからなかったものが億稼いだんですね。アイデア一つで勝負できるので是非考えてほしいと思います。

3. 質疑応答

○丸山 わかりました。谷口先生のドラマに対する情熱がひしひしと伝わってきます。先生ありがとうございます。質問がありましたら幾つか受けたいと思います。

●質問者 A メディア業界に就職したい学生も多いかと思うので、先生の就活についてお聞きしたいです。

○谷口 僕は現在メディアプルポという制作会社にいます。実はメディアと言うのはテレビ局、雑誌、新聞色々あります。僕自身は関西テレビに先輩がいて、遊びにいったんです。いろんなテレビの現場に引きずり回されて、本当にきつて行くたびに誰かに絡まれて、後から聞けばこんなに厳しい現場だということを見せたかったようです。就活の面接で、先輩は局の中でも怖い人の一人だったので、あそこに面接に行ったのなら気骨があるんじゃないかと思われたのかもしれないです。とにかく OB 訪問が大きかったですね。先輩のところやフジテレビなどに行って受かったんです。物を書く練習はしました。元々書くことは好きだったんです。メディアと言うのはものを書けないとい

けないんですね。物語、ストーリーを作れることが大切なんです。僕は「パソコン」「コーヒー」「浮気」で話を作りなさいなどというのが得意で、自分でも面白い物が書けたなと思うことが多かった。キャラクターや、物をかける力が必要かもしれません。

●質問者 B お話有難う御座いました。私もテレビ業界やドラマなどに関わりたと思っているのですが、関わるにあたって覚悟というか、アドバイスなどあればうれしいです。

○谷口 自分の時間が持てないことですね。休みがなくて、年に一日しか休んでなかったりします。元旦に休んで気づけば大晦日です。それが一番の覚悟かな？逆に質問ですが、テレビ局にどういうイメージをお持ちですか？

●質問者 B 現場はとにかく大変というイメージです。

○谷口 仕事は慣れれば必ずできます。アドバイスできることがあるとすれば、何年後かには必ずいいことがあるということです。最初は時間も無くしんどいと思います。でも何年後かに必ずいいことがあって、自分が作った一部分だけでも放送されて自分の名前が出て親が見たりして、というのは幸せです。それをモチベーションに次をがんばれるんですね。最初の3年ほどは我慢かな。女性は強いんですが折れたら早い。これは僕の経験なのですが。どこかで上手い具合に発散していくほうが良いと思いますね。仕事量の問題もあります。仕事量があるから時間が無いんです。休み

が無い、時間が無い、その覚悟はいると思います。でもやっていると必ずいいことがあります。それだけは断言できます。

○丸山 前に谷口先生に教えてもらった必殺の言葉があるんですよ。何でも通じると思うのですが。

○谷口 制作者として必要なモノは二つかなと思っています。一つは人としての「矜持」。プライド、誇りです。いつでもこれを忘れちゃいけない。仕事をやっている矜持。自分はいいいことを一生懸命やっているという矜持。だから耐えられるんですね。風呂に入れなくても矜持がある。ロケでもめても土下座ができる。それは矜持があるからです。もう一つ、クリエイターに必要なのは「謙虚さ」ですね。これを失ってはいけない。謙虚さとはアドバイスされたときに、くそっと思うのをある程度自分の中に入れちゃうんですね。こう思う人もいるんだと。耳を貸す謙虚さですね。最終的に判断するのは自分ですが、聴く耳を持つかどうかが一番大切なんです。選択肢が自分自身の中で広がりますから。これって得なんですね。クリエイターだけじゃなく何の仕事でも必要なモノだと実感しています。

○丸山 ドラマ作りから教えていただいた言葉ですが、すべての仕事に通じることだと思いますね。この言葉を今日のお土産として終わりにしたいと思います。谷口先生、本日はどうもありがとうございました。

○谷口 ありがとうございました。

関西テレビ放送株式会社

谷口 俊哉（たにぐち としや）氏

関西トップクラスのTVプロデューサー・演出家。京都大学卒業後、関西テレビ放送に入社。一貫して制作現場に関わり、特にドラマを中心に番組制作を行い、近年は関ジャニ∞のドラマDVDで販売ランキング一位を記録するなど、関西ジャニーズJr.のドラマを制作。現在は関西テレビ子会社の番組制作会社、株式会社メディアブルボの常務取締役。

